

定性に関する一考察
— 定情報という概念について —

庵 功雄

[キーワード]: 定、定情報、論理的-デフォルト的定、s-定冠詞とf-定冠詞、
結束性

[要旨]

英語に比べて日本語の「定」に関する研究はあまり進んでいない。それは英語には「定冠詞」があり、定が統語カテゴリーであるのに対し、日本語にはそれがなく深く関連している。しかし定は定冠詞の有無といった形式的な問題以上にある種の普遍性を持つ概念であり、それを類型論的に捉えるためには何らかのモデルが必要となる。このことを考えるために、本稿ではまず「定」に関する幾つかの概念に対する本稿なりの定義を与える。次に「定」を「定情報」と「論理的-デフォルト的定(LDD)」に二分する。一方、日本語でも(文脈指示の中の)ある種の環境では「この/その」が必須になる。これをf-定冠詞(機能的定冠詞)、英語等に存在する統語的に必須である定冠詞をs-定冠詞(統語的定冠詞)と呼ぶと、s-定冠詞は定情報及びLDDで使われるのに対し、f-定冠詞は定情報のマーカーでしかなく、LDDにはマーカーがつかない。これは日本語だけに見られる現象ではなく、他の「定冠詞を持たない言語」にも見られるものようである。このことから(マーカーレベルで)類型論的に真に比較可能なのは「定情報」であることが分かる。

0. はじめに

定性(definiteness)の研究は英語等の冠詞を持つ言語では盛ん(eg. Chafe(1976), Halliday & Hasan(1976), Hawkins(1978), Prince(1981), Woisetschlaeger(1983), Corblin(1983), Gundel et al.(1989), Givon(1993))だが、日本語ではあまり行われていない(ただし、田中(1981), 金水(1986)等に言及がある)。これは、日本語では(「冠詞がない」ことから分かるように)「定/不定」という概念の「文法化の度合いが低い」(益岡(1990:73))ためだと考えられる。

しかし「定」という概念は「定冠詞の有無」といった形式上の問題以上の普遍性を持っており、「結束性(cohesion)」を考える上でも最重要の概念の一つであると言える。

このことに関して興味深い研究に、Chesterman(1991)がある。同書はいくつかの素性を用いて、「定冠詞を持つ言語」である英語と「定冠詞を持たない言語」であるフィンランド語における「定」の表され方を比較している。この「定冠詞を持つ言語/持たない言語」という考え方は「定」の研究において重要な視点であると思われる。本稿は具体的な分析法において同書に従うわけではないが、同書の考え方を重視し、日本語と英語の事実に基づいた若干の比較を行い、今後の類型論的研究に対するモデルの提案としたい。

1. 定と定情報

本章では定性に関するいくつかの概念を概観する。

1-1. 「定」とは

「定(definite)/不定(indefinite)」は聞き手の立場からの分類である^[1]。即ち聞き手が知っている(と話し手が認める)名詞句が「定名詞句(definite NP)」である(cf. Chafe(1976), 金水(1986))^[2]。

1-2. 「定冠詞」とは

英語には冠詞があり、日本語には冠詞がないと言われる。これは次のようなことである。

(1)ジョンが本を読んだ。

(2)*John read book.

つまり、英語の「定/不定」は「統語カテゴリー」であるから、そのマーカーを欠く(2)は非文だが、日本語のそれは統語カテゴリーではないからそれをマークしなくてもよい。従って、次のように言える。

(3)日本語には「統語カテゴリーとしての」冠詞はない。

本稿では「定」を問題にするので、ここでは「定冠詞がある/ない」ということの意味を今少し考えてみたい(φはそこに要素がないことを示す)。

(4) 昨日本を読んだ。本は面白かった。

(5) a. Fred was discussing an interesting book in his class. I went to discuss the/this/* \emptyset book with him afterwards.

(Hawkins(1978:87))

b. Fred was discussing (some) interesting books in his class. I went to discuss the/these/* \emptyset books with him afterwards.

c. I read *book/books yesterday.

英語の場合、(5a, b)から分かるように(名詞の単複に関わらず)定名詞句を「ゼロ」でマークすることはできない(なお「不定」の場合には(5c)から分かるようにゼロの複数名詞が許される)。他方、日本語では(4)から分かるように定名詞句をゼロでマークすることが可能である。

このことからある言語が「定冠詞を持つ/持たない」というのは次のように規定できる。

(6) a. 定冠詞を持つ言語では、定名詞句は定冠詞またはそれと paradigmaticな関係にある語(限定詞(determiner))でマークされなければならない。

b. 定冠詞を持たない言語では、定名詞句は必ずしも限定詞相当語^[3]でマークされなくてもよい。

これから次のように言える。

(7) 日本語には統語レベルでの定冠詞はない。

1-3. 定情報とLDD

ここでは1-1.で定義した「定」の下位分類について考える。

1-3-1. 定情報

定情報(definite information)は本稿が独自に定義する概念で、名詞句NP1(先行詞)に二度目以降に言及する際のNP2(照応名詞句)のことを指し^[4]、Prince(1981)のtextually evokedに相当する。

日本語における定情報の表し方は、(8)のように名詞を繰り返すものと、(9)のように先行詞を言い換えるものに大別される。なお#は連文論的に不適格で

あることを示す(統語的適格性に関するものではないことに注意されたい^[5])。

(8) 昨日ぜんざいを食べた。この/その/ \emptyset ぜんざいはうまかった。

(9) エリザベス=テラーが結婚した。(a)この/(b)#その/(c)# \emptyset 女優が結婚するのはこれで7回目だそうだ。

1-3-2. 論理的-デフォルト的定(LDD)

「論理的-デフォルト的定(logical-defaultive definite.以下LDDと略す)」も本稿が独自に定義するもので、「定」から「定情報」を除いた部分を指し、Hawkins(1978)の「第一発話の定記述(first-mention definite description)」に相当する。これを定情報と区別するのは、定情報が「結束性」に関わるのに対し、LDDはそれに関わらないからである^[6]。

LDDはまず「観念指示」と「非観念指示」に大別される。「観念指示」は話し手と聞き手の間で指示対象についての共通知識がある場合である。例えば、(10)には聞き手が'dog'を知っているという解釈とそうでない解釈があるが、前者の解釈が「観念指示」に当たり、その場合のみtheをthatに置き換えることができる。また日本語の「観念指示」は通常、(11)のように「あの」で表される^[7](「観念指示」を「文脈指示」から区別すべきであることに関する議論については春木(1991)を参照されたい)。

(10) I couldn't sleep last night. The/That dog next door kept me awake. (Gundel et al. (1989:90))

(11) あの試合は惜しかったね。

次に「非観念指示」は「総称指示」「唯一指示」「デフォルト的指示」「連想的指示」に分けられる。

「総称指示(generic reference)」は(12)のように指示対象が類(class)レベルで同定可能なものであり^[8]、「唯一指示(homophoric reference)」は(13)のように指示対象が(通常)世界に一つしかないため定となるものである^[9]。

また「デフォルト的指示(defaultive reference)」とは指示対象の決定が運用論的な要因に委ねられ、他に妨げるものがない時のその名詞句の指示対象が決まっているものである。例えば、(14)の'the Prime Minister'はこの文をイギリス人がイギリス人に対してイギリスで発すれば「イギリスの首相」を指す

(デフォルト値)。しかし、これはあらゆる文脈で成り立つのではなく、例えば、(14)を同じ人が同じ人に対してフランスで発すれば「イギリスの首相」を指すのか「フランスの首相」を指すのか曖昧になる (cf. Hawkins(1978:116))。

「連想指示(associative reference)」とは「本-著者」「家-屋根」のような連想関係で指示が行われるもの (cf. Hawkins(1978:123ff.)) である。

(12)a. The horse works quite hard.

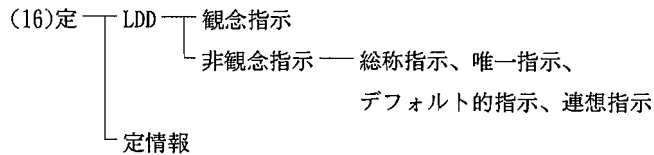
b. Horses work quite hard. (a, b共、池内(1985:79))

(13)The sun has set in the west.

(14)The Prime Minister has just resigned. (Hawkins(1978:89))

(15)Fred was discussing an interesting book in his class. He is friendly with the author. (Hawkins(1978:86-87))

以上をまとめると次のようになる。(「固有名詞」「現場指示」は除く)



(16)で「観念指示」は発話時に聞き手が具体的な「指示対象」を知っている場合で、「非観念指示」は聞き手が「指示対象」を知っていることが必要条件でない場合である^[10] (ただし一般的知識のレベルでは知っている。cf. 注2)。

2. 定情報とLDD

本節では「定情報」と「LDD」の形式面の表され方の違いを見てみる。

2-1. f-定冠詞

(7)から分かるように、日本語には統語的な定冠詞 (syntactic definite article。以下、s-定冠詞と呼ぶ) は存在しないが、(17)-(20)から分かるようにあらゆる定情報がゼロ表示を許すわけではない。

(17)昨日久しぶりに『坊っちゃん』を読んだ。この/#その/#本はいつ読んでも面白い。

(18)何かの拍子で有名になった人を政界がねらう例は、もはや珍しくなくなった。せっかくの知名度を集票に生かそうという算段だ。社会の矛盾を憤り、その解決に情熱を燃やすといった政治家本来の資質よりも、大向こうをわっと沸かせるタレント性が、この(/#その/#本)業界でも、いつの間にか肝要になっている。(天声人語1985. 10. 11)

(19)山田君は泳ぎが得意で国体に出たこともあるんです。その/#この/??の山田君が溺れ死ぬなんて信じられません。

(20) 思えば私の精神形成期ともいうべき昭和一〇年から三〇年にかけては、外国のことは絵空事であった。教科書で習い、本で読んでも「実態」や「実感」はなかった。私のはじめて外国というものを見たのは昭和三六年であるが、夜が明けてアテネに着き、パルテノンが本当に存在しているのを知ったとき、夢ではないかと自分の腕をつねったほどだった。

しかも私は、パルテノンよりシベリア鉄道の方に関心がある。

その(/#この/#本)シベリア鉄道の象徴「ロシア号」が、すぐ目の前に停っている。できればいますぐこの列車に乗りたいと思う。

(宮脇俊三「シベリア鉄道9400キロ」)

(17)(18)では「この」、(19)(20)では「その」の使用が必須的である^[11]。このことから、「この」「その」を「定情報のマーカー」と考えることができる。本稿では「定情報のマーカー」としての「この」「その」を機能的定冠詞 (functional definite article。以下、f-定冠詞) と呼ぶ^[12]。すると次のことが言える。

(21) 日本語にはs-定冠詞は存在しないが、f-定冠詞は存在する。

2-2. f-定冠詞とLDD

本節では英語と日本語のLDDの特徴について概観する^[13]。

(22)The horse works quite hard.

(23)The sun has set in the west.

(24)The Prime Minister has just resigned.

(25)Fred was discussing an interesting book in his class. He is

friendly with (a)the author/(b)#this author.

(Hawkins(1978:86-87))

(26)Don't go in there, chum. The dog will bite you.

(27)#This/#that horse works quite hard. (総称指示としては不適)

(28)#This/#that sun has set in the west.

(29)#This/#That Prime Minister has just resigned.

(30)Don't go in there, chum. This/That dog will bite you. (≠(26))

(Hawkins(1978:103))

例えば(24)はデフォルト的に解釈され、第一発話^[14]でも使えるが、(29)を第一発話で発するとWhich one?等のWH疑問文を誘発する。同様に(22)(23)(25a)も第一発話で使えるが、(27)(28)(25b)は(現場指示または先行文脈が存在する場合でのみ適格なので)第一発話では使えない。

これに関して興味深いのは(26)と(30)の違いである。即ち、(26)は犬が聞き手に見えない文脈でも使えるが、(30)はその文脈では不適である。

次に(22)-(30)に対応する日本語の表現を見てみる。

(31)馬はよく働く。

(32)太陽が西に沈んだ。

(33)首相が辞めた。

(34)フレッドが教室で面白い本の話をしてた。彼は著者と仲がいい。

(35)#この/#その/#あの馬はよく働く。(総称指示としては不適)^[15]

(36)#この/#その/#あの太陽が西に沈んだ。

(37)#この/#その/#あの首相が辞めた。

(38)フレッドが教室で面白い本の話をしてた。彼は(a)#この/(b)その著者と仲がいい^[16]。

(39)そこに入るな。犬が噛むぞ^[17]。

(40)そこに入るな。#この/#その犬が噛むぞ。

(41)バケツを取って。

一見して分かるように、(31)-(34)はWH疑問文(「えっ、どの?」等)を誘発しないが、(35)-(38a)は誘発し第一発話では使えない。

以上をまとめると次のようになる。

(42)英語のLDDはs-定冠詞でマークされ指示詞ではマークされない。一方、定情報はs-定冠詞でも指示詞でもマークされ得る。日本語のLDDはゼロでマークされ「この/その」(f-定冠詞)ではマークされない。一方、定情報はf-定冠詞でマークされ得る。

図示すると次のようになる。

(43)

	英語	日本語
LDD	s-定冠詞	ゼロ
定情報	s-定冠詞/指示詞	ゼロ/f-定冠詞

3. 類型論的比較のモデルへ向けて

(42)は英語と日本語の比較である。本章では今後の類型論的研究に向けてのモデルとするために、(42)の「英語」を「s-定冠詞を持つ言語」に、日本語を「s-定冠詞を持たない言語」に置き換え、次のような仮説を立ててみる。

(44) (仮説)

a. s-定冠詞を持つ言語(例えば英語)のLDDはs-定冠詞でマークされ指示詞ではマークされない。一方、定情報はs-定冠詞でも指示詞でもマークされ得る。

b. s-定冠詞を持たない言語(例えば日本語)のLDDはゼロでマークされf-定冠詞ではマークされない。一方、定情報はf-定冠詞でマークされ得る。

(44)の意味は、統語カテゴリーとして「定」を持つ言語に存在するs-定冠詞は基本的に全ての「定」をマークできる^[18]が、そうした定冠詞を持たない言語ではたとえそれに疑似した機能を持つ語(f-定冠詞)が存在しても、それによってマークされるのは(典型的な定である)「定情報」だけであり、その語でいわば「論理的」な「定」であるLDDをマークすることはできないということである。ここにf-定冠詞とs-定冠詞の性質の違いが見られるのである。以下、s-定冠詞を持たない言語の例としてフィンランド語と韓国語を取り上げ(44b)を検証する(一方、注12で述べたように(44a)は他のs-定冠詞を持たない言語であるポルトガル語においても成り立つ)。

3-1. フィンランド語 (データはChesterman(1991)による)

この言語には s-定冠詞はなく、語順、格の交替、機能語(function word)の使用等で「定/不定」を表すという (cf. Chesterman(1991:cp. 5))。

(45) Kerran tuli junaan arpakauppias. (Chesterman(1991:100))

once came train-人 lottery-seller-主

'Once a chap selling lottery tickets got on the train.'

(46) Riihimäellä mies jäi junasta. (ibid.:100)

Riihimaki-處 man-主 left train-處

'The man got off at Riihimaki.'

(47) Heti oven takana rappukäytävässä häneltä putosi se pullo.

at-once door-属 behind staircase-内 he-奪 dropped it-主 bottle-主

'He'd just stepped out onto the staircase when he dropped the bottle' (ibid.:103)

(48) Esine oli se kultainen maisterinsormus. (ibid.103)

thing-主 was it-主 gold-主 ring-主

'The tiny object was the gold ring.'

(49) Esine oli kultainen maisterinsormus.

thing-主 was gold-主 ring-主

'The tiny object was a gold ring.' (complement)

(50) *Se kuu paistaa kauniisti. (ibid.:151)^[19]

It-主 moon-主 shine beautifully

'The moon shines beautifully.'

(51) Tämä on hyvä kirja. *Se kirjoittaja on tanskalainen.

This is good book It-主 author-主 is Danish

'This is a good book. The author is a Danish.' (ibid.:150)

まず、無標の語順では動詞の後ろの名詞句は「不定」、前の名詞句は「定」と解釈される (cf. (45)(46)(49))。従って、動詞の後ろの位置で「定」と解釈させるには多くの場合機能語 se/ne の付加が義務的である (cf. (47)(48))。このことからこの言語にも f-定冠詞が存在すると考えられる。

またLDDを表すのに機能語 (f-定冠詞) は使えない (cf. (50)(51))。

3-2. 韓国語^[20]

この言語には定情報を表す場合に日本語とかなり近い現象がある。例えば、(53)(55)では「이」(この)、「그」(その)が必須的である。このことから韓国語にも f-定冠詞が存在すると考えられる。

(52) 昨日久しぶりに『坊っちゃん』を読んだ。この/#その/#本はいつ読んでも面白い。(=(17))

(53) 어제 오랫만에 [보통]을 읽었다. 이 (#그/#책)은 언제 읽어도 재미있다.

(54) 山田君は泳ぎが得意で国体に出たこともあるんです。その/#この /??山田君が溺れ死ぬなんて信じられません。(=(19))

(55) 야마다군은 수영을 잘해서 고등학교때에는 국제에 나간 적도 있습니다. 그 (/?이/#물)에 빠져 죽다니 믿을 수 없습니다.

またLDD (eg. (24)) を表す場合には f-定冠詞 (이, 그) は使われないという。以上の2言語の事実から、(44)が普遍的妥当性を持ち得る可能性があることの傍証が得られたと思う。

4. まとめ

本稿では「定冠詞を持つ言語と持たない言語における「定」の表され方の違い」という観点から英語と日本語の比較を試みた。そのためにまず、「定」を「定情報」と「論理的-デフォルト的定(LDD)」に二分した。すると(定冠詞を持たない)日本語にも「定情報」をマークする機能を持つ語 (f-定冠詞) が存在することが分かった。しかし、この f-定冠詞はある名詞句がLDDであることをマークすることはできない。一方、英語の定冠詞は基本的に全ての定名詞句をマークすることができる。これが「定」に関する英語と日本語の差である(そしてこの差のために両言語における「定」のカテゴリーに若干の差が見られることが分かった。cf. 注16, 17)。そして最後にこの差は単に英語と日本語の差であるだけでなく、定冠詞を持つ言語と持たない言語という言語タイプレ

ベルでの差ではないかという仮説を提示し、その若干の検討を試みた。もしこの仮説が正しければ、「定」がマークされ(得)るのは「定情報」だけということになり、比較の対象が今までより明確化されることになる^[21]。本稿の考察が今後の定性研究に一助となれば幸いである。

[注]

[1]一方、「特定(specific)／不特定(non-specific)」は話し手の立場からの分類である。例えば、「山田太郎」が「健」を殺したことを知っている話し手が(7)を発した場合「健を殺した奴」は「特定」だが、その事実を知らない話し手が(7)を発した場合「健を殺した奴」は「不特定」である(なお、聞き手が、誰が健を殺したかを知らない場合、どちらの解釈でも「健を殺した奴」は「不定」である)。

(7)俺は健を殺した奴を許さない。

[2]ただしここで「知っている」ということのレベルが問題になる。例えば「知っている」ということを「指示対象(referent)」のレベルで問題にすると、(イ)は「不定」となるが、英語では「定冠詞」が使われている以上「定」である(cf. Hawkins(1978), Chesterman(1991))。なお、金水(1986:604)は(ウ)の'the church'を「不定指示」としているが、聞き手がその教会を同定できなければ、'Which church?'のような疑問が誘発されることから、(ウ)は運用論的に適切に用いられる限り「定」(観念指示ないしデフォルト的指示)であると考えられる。つまり、本稿では定冠詞のついた名詞句は全て「定」であると考え、ただし逆は真ではない。cf. 注8)。ただしこれが日本語(eg. (イ))にも同様に当てはまるかには議論の余地がある(cf. 注16)。本稿では指示対象が同定可能である場合をプロトタイプ的な定と考え、それ以外のレベルでの同定可能性に依存する定は非典型的であると考え(非典型的な定は(定冠詞を持たない言語では)定にならない可能性がある)。

(イ)I read an interesting book. But I don't know the author.

(ウ)I go to the church every Sunday. (金水(1986:604))

(イ)面白い本を読んだ。しかし著者は知らない。

なお「固有名詞」は「定」だが(英語では)通常定冠詞はつかない。また

現場指示用法の名詞句は「定」だが本稿では考察の対象としない。

[3]「限定詞相当語」は後述のf-定冠詞のことである。

[4]「定情報」は先行詞と照応名詞句が同一物指示になる場合の問題である。

従って(9)の「エリザベス=テラー」と「女優」の関係における後者は定情報だが、(イ)の「本」と「著者」の関係における後者は定情報ではない。なお、「固有名詞」「総称名詞句」は初出時既に「定」ではあるが、再度言及されない限り「定情報」にはならない。また(ウ)のように、先行詞がstageレベル(Carlson(1977))で照応名詞句がkindレベル(ibid.)である場合には照応関係が成り立たないので(ウ)は定情報名詞句ではない。

(ウ)昨日公園で犬を見かけた。私は(a)犬が大好きだ。

[5]例えば、(9b, c)は「一文だけ」なら適格であるが、先行文脈と「つながった」ものとして解釈しようとするとは不適格になる(cf. 庵(1993a, b, 1994))。なお、現場指示(deictic)用法(写真の人物を指すような場合も含める)は考察の対象から除外する。

[6]LDDと定情報の区別は基本的にはHalliday & Hasan(1976)のテキスト外指示(exophoric)とテキスト内指示(endophoric)の区別に対応するが、同書の規定には総称指示の扱い等不明な点があるので、ここではより厳密に考えるために本稿独自の規定をする。

[7]ただし(7)で「健を殺した奴」のことを聞き手も知っているという解釈の場合はゼロでも観念指示になる(この解釈の場合に限り「あの」を付けても文意が変わらない)。

[8]金水(1986)は「総称指示」を「定指示」と別に立てている。またCarlson(1977)は英語のbare pluralを類(kind)を指すものと分析している。つまりbare pluralは総称指示の冠詞を内包しているとも考えられる(総称指示についてはBurton-Roberts(1976)も参照されたい)。しかしChafe(1976:39)のように「定」を「指示対象の同定可能性」に求めるならば、「総称指示」を「定」の下位区分と考えてはならない積極的な理由はないように思われるので本稿では「総称指示」を「定」の中を含めることにする。

[9]「唯一指示」と「固有名詞」の違いは難しい問題だが、例えば「月」という名詞は「木星」のことを話題にしている場合には「木星の月」を指すこ

とから分かるように何らかの変項を含んでいる（ただし通常その存在は意識されないが、「固有名詞」はそういった変項を含まない（(カ)のような場合の「太郎」は普通名詞であろう）。このことから「唯一指示」は「デフォルト的指示」に含めるべきかもしれない。

(カ) このクラスには太郎が3人いる。

[10]「観念指示」と「唯一指示」「総称指示」は似ているが別のものだと考えられる。即ち、前者では聞き手は「具体的な」指示対象を想起するのに対し、後二者ではそうしたものを想起していない。従って「唯一指示」「総称指示」が「第一発話の定記述」として機能するためには一般的な（百科事典的な）知識があればよいが、「観念指示」がそのように機能するためには話し手と聞き手の間で共有される具体的な知識による必要がある。

[11]文脈指示（テキスト内指示）における「この」と「その」の機能の違いについては、拙論（庵(1993a, b, 1994)）を参照して頂きたいが、ここでその概略を述べると次のようになる。

(キ)（「その」の機能）先行詞にテキスト内で付与される属性（(19)で言えば先行詞「山田君」に対して付与される「泳ぎが得意で国体にも出たことがある」という属性。庵(1993b)では「テキスト的意味」と呼んでいる）をマークする。

(ク)（「この」の機能）テキスト内に「この+NP」と照応する名詞句が存在するからそれを探せという指令を発する。

[12] f-定冠詞は「定情報のマーカー」である。従って、(8)のように省略可能である場合の「この」「その」も f-定冠詞であると考えられることができる。

[13](22)-(30)の現象は基本的に（s-定冠詞を持つ言語である）ポルトガル語でも同様に成り立つ（ポルトガル語の例文については大阪大学文学研究科のナカミズ・エレン氏のお手を煩わせた。記して感謝致します）。例えば、(ケ)(コ)のようである。ただし、定冠詞+単数名詞では総称を表せない。

(ケ)0/#Este/#Aquele Primeiro Ministro acabou de se demitir.

the/#this/#that Prime Minister has just resigned(=(24),(29))

(コ)0 cavalo traballra muito. (総称指示としては不適)

the horse works hard(=(22))

[14]本稿では「第一発話」を聞き手に指示対象についての具体的な知識がない文脈（即ち「非観念指示」）の意で用いる。

[15]「あの」の場合「観念指示」になるが、「観念指示」は注14で定義した意味の「第一発話」では使えない。

[16](38b)は第一発話で使用可能だが、この場合の「その」（以下「その2」と呼ぶ）は林(1983)の言う「代行指示」に当たり、単一文中で照応することが可能である。即ち、この場合の「その」は（f-定冠詞の「その」（以下「その1」と呼ぶ）とは異なり）「定情報」をマークしておらず、「その1」とは機能的には別語であると考えられる。従って、「その2」は（少なくとも）典型的な「定」とは考えられない。また次例を考えて頂きたい。
(サ)昨日公園で先生が(a)その2/(b)の著書を読んでおられた。

(シ)昨日公園で先生が本を読んでおられた。

(ス)太郎には弟が一人いる。その弟は喧嘩好きで皆の嫌われ者だ。太郎にはいつも(a)このその2弟のことが心配でならない。

(セ)昨日公園で先生が(a)その（御）自分の著書を読んでおられた。

(ソ)「ユル・ブリナー」は肺がんを宣告されてからも、『王様と私』を演じ続けた。舞台を見た淀川さんは「最後まで立派にやりとげようとしていることがよくわかった。舞台がなかったらもっと早く亡くなっていたかもしれない」と語っている。「人生に限界はない。全人生が絶頂を求める永遠の探究だ」。この自分の言葉を忠実に守った人だった。

(天声人語1985.10.12)

(タ)*I read a/the his book.

(チ)（(カ)と同義）と(ソ)を比べると、前者は必ず「先生の著書」を意味するが、後者は決して「先生の本」を意味せず「不定の（聞き手が知らない）本」を意味する（cf. 庵(1993c)）。このことから「その2+NP」は典型的な「不定」とも言えない。一方、(カ)の表層での適格性は微妙だが、(カ)が「その1」としか解釈されないことから分かるように「その2」と「自分の」はparadigmaticな関係にあり、(ソ)から分かるように「この」と「自分の」はsyntagmaticな関係にあるので「この」と「その2」もsyntagmaticな関係にあると言える。従って、「この/その1」が「定（情

報)」のマーカである以上)「その2/自分の」を「定/不定」以外の
 範疇に属するものとも考えることも可能であろう。一方、英語の所有代名詞
 は(夕)から分かるように(冠詞とparadigmaticな関係にある)「限定詞」
 なのでそれを含む名詞句は必ず「定」または「不定」である。

[17](39)は(26)に対応する。そして(26)の'dog'は「第一発話の定記述」とし
 て機能できる。この場合s-定冠詞を使ってもWH疑問文を誘発しない理
 由は、「連想指示」の場合と同様であると考えられる。つまりその発話状
 況の中に「犬」がいることが無理なく連想できるので定冠詞が第一発話で
 も使えるのである。これに関して興味深いのは次の対立である。

(夕)Harry, mind (a)the/(b)that table!. (Hawkins(1978:113))

(ツ)Pass me (a)#the/(b)#that bucket, please. (ibid.(1978:103))

Hawkins(1978)によると、(夕)(ツ)の中で目の見えない相手に対して使える
 のは(夕)だけであるという。これも部屋の中に「机」が存在することは連
 想可能だが「バケツ」が存在することはそうではないことから説明できる。
 しかし、同様の議論を(39)について行うことは不可能であるように思われ
 る。つまり、(39)の「犬」は「定」で、(41)の「バケツ」は「不定」で
 あるとするのは不可能であろう。従って((41)の「バケツ」が「不定」とし
 か考えられない以上)(39)の「犬」は「不定」であると考えざるを得ない。

[18]例えば英語では定を表す際に定冠詞は常に使用可能である(cf. Gundel et
 al.(1989))。しかし、フランス語には即時反復の逆説(paradoxe de la
 reprise immediate)と呼ばれる次のような現象があり(cf. Corblin(1983)、
 春木(1986)、井元(1989)etc.)、定冠詞が使えないことがある。(ただし
 この現象は同じロマンス語でもポルトガル語には見られないという(ナカ
 ミズ・エレン氏のご教示による))。

(夕)Une femme entra dans la piece. J'avais vu *la/cette femme

(a woman entered into the room I had seen *the/this woman

chez mon ami.

house-of my friend)

(ト)Tu verras un garçon et une fille. Tu dois donner une poupee

(you will-see a boy and a girl you must give a doll

a la/??a cette fille et une voiture au/??a ce garçon.

to the/??to this girl and a car to the/??to this boy)

((夕)(ト)共、Corblin(1983:118))

- [19]Chesterman(ibid.:151)によると(50)は適格であるという。ただし、その
 場合のseは冠詞ではなく、強調を表す助詞として機能しているという。従
 ってseがf-定冠詞と解釈される限り(50)は非文法的であると考えられる。
 [20]韓国語のデータに関しては、翻訳・例文の判断とも、大阪大学文学研究科
 の鄭相哲氏のお手を煩わせた。記して感謝いたします。
 [21]「定情報」を考察の対象とすることで見えてくる問題に文脈指示における
 定冠詞と指示詞の機能の違いということがある。これに関して、フランス
 語についてはCorblin(1983)、春木(1986)、井元(1989)等に興味深い指摘
 がある。また井元(1993)はフランス語での知見に基づく対照研究の試みと
 して興味深い。

[参考文献]

- 庵 功雄(1993a)「「この」と「その」の文脈指示用法の研究－日本語におけ
 る定情報の扱われ方－」1992年度大阪大学修士論文
 ー (1993b)「テキストの意味の付与について」ms.
 ー (1993c)「語彙的意味に基づく結束性について」
 1993年度日本言語学会秋季大会発表要旨
 ー (1994)「結束性の観点から見た文脈指示－文脈指示に対する一つの接
 近法－」『日本学報』13 大阪大学文学部
 池内正幸(1985)『新英文法選書第6巻 名詞句の限定表現』大修館書店
 井元秀剛(1989)「1eNとceNによる忠実照応」『フランス語学研究』第23号
 日本フランス語学研究会
 ー (1993)「日本語とフランス語のdeixis(指示詞)」
 『仏語仏文学研究』第9号 東京大学仏語仏文学研究会
 金水 敏(1986)「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念国語研究論集』
 明治書院
 坂原 茂(1990)「役割、ガ、ハ、ウナギ文」『認知科学の発展vol.3』講談社

- 林 四郎(1983)「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座五運用 I』
朝倉書店
- 春木仁孝(1986)「指示形容詞を用いた前方照応について」
『フランス語学研究』第20号 フランス語学研究会
- (1991)「指示対象の性格からみた日本語の指示詞-7/を中心に-」
『言語文化研究』17 大阪大学言語文化部
- 益岡隆志(1990)「モダリティ」『講座日本語と日本語教育第12巻言語学要説(下)』
明治書院
- Burton-Roberts, N. (1976) "On the generic indefinite article"
Language 52-2
- Carlson, G. N. (1977) "A unified analysis of the English bare plural"
Linguistics and Philosophy 1
- Chafe, W. L. (1976) "Givenness, contrastiveness, definiteness, subjects, topics,
and point of view" in Li, C. N. (ed.) Topic and subject Academic Press
- Chesterman, A. (1991) On definiteness Cambridge University Press
- Corblin, F. (1983) "Defini et demonstratif dans la reprise immediate"
Le francais moderne 51-2
- Fukui, N. (1986) A theory of category projection and its applications
Ph. D dissertation, M. I. T.
- Givon, T. (1993) English grammar John Benjamins Publishing Company
- Gundel, J. et al. (1989) "Givenness, implicature and demonstrative
expressions in English discourse" CLS 25
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) Cohesion in English Longman
- Hawkins, J. A. (1978) Definiteness and indefiniteness Croom Helm
- Prince, E. (1981) "Toward a taxonomy of given-new information"
in Cole, P. (ed.) Radical Pragmatics Academic Press
- Woisetschlaeger, E. (1983) "On the question of definiteness in
'An old man's book'" Linguistic Inquiry 14-1

(いおり・いさお) 本講座大学院生